

## 今、世界は

楠瀬健昭

いつしか、詩らしきものを書きはじめていた。

思い起こせば、高校時代、個性的なクラスメートばかりの中で、わたしは何一つ誇るものとしてなく、ただ周りの世界に感動するのみだった。それでも詩の授業の中で、ある詩を読んだ感想、あるいは立派な詩をつたない散文に移し替えたものを、後にH氏賞を受賞される担当の先生に、クラスで読んでいただいたことを誇らしく思っている。先生にほめていただいたという記憶はなく、クラスメートからも、何かことばをかけてもらったかどうかとも思い出せないが、隣のクラスの友人から、隣のクラスでも、わたしの作文が披露され、少なくとも、その友人は「さすがだなー」と言ってくれたことは覚えている。

このことを思い出したのは、つい最近のことである。英国詩人ホプキンズの研究会に参加してから二十年になるが、ようやく、難解といわれる詩を少しだけ理解できるようになった気がする。それとともに、ホプキンズの詩に触発され、いつのまにか詩らしきものを書きはじめていた。

四年の京都遊学が過ぎれば、教員免許を取り、田舎に帰り、教職につくという漠とした未来は念頭にあったが、志らしい志も持たず、文学部に、後半の二年は英文科に在籍した。「ことばに対する鋭い感覚に裏打ちされた精細緻密なテキスト読解」を学風とする教授のもとで学びながら、その時のわたしには教授に教えを請うことの価値が、まったくわかっていなかった。わずかに、後年、名著『ことばと詩』と『神と悪魔との間で』を繰り返し読むことで、失われた貴重な経験を取り戻そうとした。

今、つたないながらも、詩作がわたしを表現する好ましい手段になっている。

今、世界は

むなしき言葉吐きながら  
日々は流れる

僕の生まれたとき、原発はなかった  
米櫃に米のないこともあった  
だけど、幸せだった  
何の不足もなかった

スギ皮葺に雪は積もり

室内外を隔てる障子一枚  
裸電球ぼんやり照らす、こたつの上で  
温州ミカンをあざやかに  
僕らのこころを温めた

漠とした希望があったからだ  
今、漠とした不安が世界をおおう

二〇一一年三月一日午後一四時四六分、いつものようにNHK FM放送を聴いていた。  
放送の途中で、臨時速報が流れ、東北に地震があったことを知るが、そのときには未曾有の  
災害になるとは思わなかった。ただ、なぜか廊下ですれ違った人に、東北に地震があったこ  
とを話した記憶がある。ちょっと大きめの地震があったぐらいにしか考えていなかった。

二〇一二年 大旦

ドラゴンよ 来たれ 新玉の年  
政の腐敗 焼き尽くし 新世界  
もたらさん

龍馬空港へ向かう海上にて

黒潮が 次に目指すは <sup>むろとざき</sup>室戸岬

川原に自生する木の枝に

<sup>きざわし</sup>木 蘇の 赤々と燃ゆ 大旦

閑慶院に向かう道で

垣根越し モズと目が合う 初詣

菩提寺で私たちを迎える

棕櫚 ムクムクムクと 六百年

境内で

大空を 抱えて凜々し 紫木蓮

毎年正月休みには、帰省することになっている。年賀状は書かないことにしているが、それ  
でもいただく年賀には、感謝の気持ちを込めて、なるべく元旦に詩を作り賀状のお礼に添え  
ている。そういうことにしてから、何年経つかわからないが、二〇一二年ものに若干手を加  
えたもの。木蓮のラテン名はMagnolia liliflora。もちろん、この時期には花も葉もない。

若人よ、集えよ、この祝祭に

若人よ、集えよ、あらためて、この祝祭に  
地は、幾度となく震え、沖つ白波、幾度となく押し寄せるとも  
この国に、音もなく、姿も見せず、降りつむものあるとも  
このディオニュソスのときを楽しみたまえ  
春夏秋冬、アポロンのときに追われ、収穫を急ぐ若人よ  
はつらつと、ゆるやかに、このときを楽しみたまえ

語れよ、ともに、笑えよ、ともに、ともに泣き、ともに汗する若人よ  
歌えよ、ともに、踊れよ、ともに、途方にくれ、ともに安堵する若人よ

年年歳歳、人同じからずとも、年年歳歳、祝祭相似たり

阿武山の空に響けよ、祭りの音楽よ、若人の歌よ、踊りよ、大地を揺るがせ  
百年の昔より、この共同体は、なにわ、かわち、せつつと、ところを移し  
存続の危機も、栄光につつまれたときもあったが、つつましく生きてきた  
世のため、人のために尽くしてきた、この学園を誇れよ

今、眺めたまえ、高きところより、この国を、霧に沈む町を  
若人よ、いにしえ人を驚かしめよ、大地に宿る精霊を  
そのとき、この国は、あらたな命をえるであろう

ため息をつき、いらだつときもあるけれど、  
やがて地は鎮まりゆく  
野分きの風、吹きわたるとも  
若人よ、あしたにむかい、走れ、叫べ、歓喜の歌を歌えよ

二〇一一年秋の大学祭。わたしの大学時代には教室で学んだことは、ほとんどなく、もっぱら自学自習であった。年二回の定期試験が一回になり、その一回が中止になり、レポート試験となることもあった。夏季休暇、冬期休暇、春季休暇はいうにおよばず、有り余る時間を有効に使うこと、あるいは無為に過ごすこともできた。ところが、今、学生は講義、実習に追われ、定期試験、再試験に追われる。束の間の非日常を楽しんでもらいたいものだ。

二〇一〇年 元旦

我が家にて

かきほせば うぐいすきたる としのくれ  
大歩危あたり  
こなゆきを まといてうれし ふゆこだち  
山里にて  
すずなりの ゆずがむかえる おらがむら  
元旦の朝に  
かわせみの かんきのこえの さんぼみち  
黒潮鉄道の車窓から  
はるのうみ なみしずまりて ふねろくそう

年賀その二。二年前元旦に詠んだ俳句らしきもの。昨年末から鳥の姿が見えない、鳥の声が聞こえないと感じているのは、わたしだけではなく、いつか新聞の投書欄にも二つの投書が「沈黙の春」を案じていた。いつもなら、我が家の庭に、スズメ、ヒヨドリ、メジロなどが、かしましいのに、ミカンを半分にしたものをバルコニーに置いても、カラス一羽も姿を見せない。ウグイスが干し柿をつつきに来た目になつかしい。そういえば、玄関のヤマボウシは、昨年の春、かつてないほど多くの白い花を咲かせ、赤い実をつけた。

蒼天を行く

帰りなむ いざ  
プロントザウルス  
伏したる村へ

流れる雲は忙しく  
地上の美白を  
まだらに染める

霜天 寒風 雲ひとひら  
蒼天 陽光 雲ひとはら

年賀その三。二〇一一年、雲上の人となり、四国山地の上を飛ぶ。

ちいさないのち

雪の降る朝に  
ちいさないのちは生まれた  
もうこれ以上うれしいことはない

満面笑顔の  
我が息子に  
心からおめでとう

お前の生まれた日のことは  
もう忘れたが  
両の手に抱いたときの  
その重みを  
忘れてはいない  
我が息子よ

父の背に背負われ  
新緑を旅したことを  
覚えているはずもないが  
せせらぎが  
今もわたしをゆさぶる  
遠い昔のせせらぎが

二〇一二年一月。今回の新作は、冒頭の詩とこの詩だけである。